

ニュースレター 明治大学史

No. 18

特集 明治大学創立140周年と
大学史関連事業

利光 鶴松
1864(文久3) - 1945(昭和20)

尾佐竹猛

長谷川太一郎

目 次

(巻頭言) 草創期明治法律学校の講義風景

明治大学史資料センター所長 村上 一博 2

(特 集) 明治大学創立140周年と大学史関連事業 3

I 刊行物 3

『鵜澤總明と明治大学』／『明治大学140年小史』／『白雲なびく遙かなる
明大山脈① スポーツ編』

II 展 示 5

鵜澤總明文庫・同展示コーナー設置／校友山脈 明治大学の教育と人材／
明治大学×SDGs 神田学生街140年の今↔昔

III イベント・記録 7

校友山脈インタビュー／鵜澤總明と明治大学（シンポジウム）／校友山脈
その140年と現在（講演・座談）／母校の歴史（講演）／阿久悠記念館
開館10周年記念イベント／和泉第二校舎記録保存事業

(巻頭言) 草創期明治法律学校の講義風景

明治大学史資料センター所長

村上 一博



本学は、昨（2021）年、創立140周年を迎えた。これまでの大学史研究によつて、前身である明治法律学校における、明治20年前後の岸本辰雄・宮城浩蔵・矢代操・磯部四郎の講義について、およその内容は知られるようになったが、草創期の講義の全容は未だ明らかではない。しかし、近年、創立者たちとともに司法省明法寮で学び、外交官として大成した杉村虎一が、明治18～20年に行った講義の筆記録が発見され、これまで不明であった草創期講義の一端が知られるようになった。

杉村は、安政4（1857）年5月に金沢藩下級士族の次男として生まれ、東京外国語学校を経て、明治8（1875）年9月に司法省法学校正則科第一期生の欠員募集に応じて同校に入学した。岸本辰雄・宮城浩蔵・矢代操の3人に、磯部四郎と杉村を加えた5人は「明法寮の五人組」と呼ばれるほど、親しかったようだが、杉村の在学期間は僅か1年ほどにすぎず、成績も芳しくなかったため、翌明治9（1876）年8月に業を卒えるにあたって、パリ大学への留学は認められなかった。同年9月から司法省に出仕して、法制官僚としての道を歩み始めたが、その傍ら、明治14年1月の創設以来、明治法律学校の教壇に立ち、明治20（1887）年6月に、外務省交際官試補としてイタリアに赴任するまで続いた。その杉村の講義筆記として、『日本訴訟法[講義]』（明治18年）、『仏国民法人事篇講義』（明治19年）、『仏国民法財産篇講義』（明治20年）が、近年、発見されたのである。

法政大学ボアソナード記念現代法研究所に所蔵されている『日本訴訟法[講義]』（村松信吉筆記、明治18年2～5月）からは、我国において明治10年前後から全国各地で開始された民事訴訟手続の実態とその問題点を知ることができる。

杉村は、講義の目的について、「日本訴訟ノ手続キノ大略」「日本現時ノ裁判所ノ慣例」を述べることとしている（中里佐太郎編『現行訴訟法』博聞社蔵版、参照）が、フランスと比較した箇所が随所に見られる。裁判所数について、杉村は、日仏は土地面積と人口については大同小異なのに、日本は財政上の理由から、フランスと比べて裁判所数が少なく「人民ハ大ニ不便」であり、「驚愕セザ

ルヲ得」ないと言い、また、大審院は「全国法律適用ヲ統壹スル所」であり、「裁判」する所ではないとの理解を示している。

勧解についての講義は、とくに興味深い。仏国訴訟法には「始審前ニ必ズ勧解ス可シ」との明文があるので、必ず勧解せざるをえないが、日本では明文がなく、明治14年12月28日太政官第83号布告第一条で「治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勧解ス」と定め、勧解に触れているものの、同布告は人民に対して発せられたものではなく、「只勧解ス可キ場所ヲ示シタルニ過ギ」ない。しかし、各裁判所では勧解を経ない訴訟を受理していないのが実態である。それは、明治9年11月27日司法省甲第17号達に、「民事ノ詞訟ハ可成丈ケ一応区裁判ノ勧解ヲ乞フ可ク…」とあるからである。そもそも、各省庁の布達は「素ト此壹般制規ノ如ク効力アルモノ」ではない。これを「守ルト否トハ人民ノ随意」である。しかも、当該達は、人民でなく裁判所に対して発せられたものである。ともかく「日本ハ法律ト実際ト相違」し、「実際ハ必ズ勧解セザル可ラザルノ慣例」となっている。ただし、例外的に、「法律ハ勿論実際ニ於テモ勧解ヲ要セザル」場合がある（司法省甲第17号達第一条の但書以下）。法律上は、「官庁ヨリ人民ニ対スル訴訟ノ事ヲ取除」していないが、実際には「人民ヨリ諸官庁ニ対スルトキモ諸官庁ヨリ人民ニ対スルトキモ勧解ヲ要セザル事ニナ」っている。例外の二つ目は、「商事ニ対スル急速ヲ要スルトキ」である。もっとも、「商事ト言フ辞ハ新語ニシテ日本ニ於テハ如何ナル点迄ヲ商事トスルカニ付ハ実ニ困難」である（杉村は、商事の概念に含まれるか否か評価が困難な事例をいくつか挙げている）。「商事ノ急速ト言フ事ヲノミ之ヲ解スレバ商事壹般ハ勧解ヲ経ルニ及バ」ないと解すべきである。法律を運用するのは裁判官に負うところが大きく、裁判官は「宜シク活眼以テ法律ヲ活用セザル可ラズ」。フランス法は百年以前の旧物で社会が進歩した今日では、全く行う理はない。それなのに今日において「未タ法律ノ不都合ヲ見ザルハ何ゾヤ」。それは「全ク裁判官ノ明識卓見以法律文ヲ死物ニセズ活物ニシテ之ヲ使用スルノ故」なのである。

ここでは、とくに勧解についての部分を取り上げたが、こうした、訴訟手続ないし裁判所慣例についての認識・解釈と批判が、講義の各所で展開されている。

すでに、紙面が尽きた。『仏国民法人事篇講義』（二冊、明治19年、村松信吉筆記）と、『仏国民法財産篇講義』（明治20年、村松信吉筆記と中村清七郎筆記の二種類がある）の内容については、別の機会に紹介することにしよう。

(特集) 明治大学創立 140 周年と大学史関連事業

I 刊行物

2021（令和 3）年、明治大学は創立 140 周年を迎えました。大学史資料センターでは刊行物、展示、イベント・記録に関わる事業を実施しました。以下にまず刊行物のご紹介を申し上げます。



『鵜澤總明と明治大学』(DTP出版 非売品)

このたび、戦前戦後 2 回にわたり明治大学総長をつとめた鵜澤總明（1872－1955）に関するコンパクトな評伝『鵜澤總明と明治大学』を刊行しました。

鵜澤は明治大学総長・弁護士・東洋法哲学研究者・教育者・政治家としてきわめて多彩な顔を持つ人物です。明治大学においては、戦前戦後 4 期 10 年にわたり総長をつとめ明治中学校の初代校長などを歴任しました。弁護士としては、血盟団事件・大逆事件・森戸事件など多くの著名事件の弁護を担当し、東京第一弁護士会長、極東国際軍事裁判で日本側の弁護団長をつとめるなど、日本を代表する法曹として活躍しました。また、政治家として貴衆両院の議員をつとめ、さらには西欧・東洋思想を架橋する法律哲学の研究者として『法律と道徳との関係』『老子の研究』など著作多数を残しています。

その多面的な活動は、一面では、鵜澤總体を理解することの難しさにもつながっており、これまで鵜澤について本格的な研究対象とされることはありませんでした。これまで評伝としては、鵜澤の死去まもなく編まれた石川正俊『鵜澤總明—その生涯とたたかい』（1956 年）がありますが、こうした先行研究を基礎としながら、①鵜澤と明治大学の関わり、②その刑事弁護、③法律哲学の特質について、新たな知見を加えることを目指しました。

執筆者は大学史資料センターの人権派弁護士研究会のメンバー（村上一博センター所長・山泉進研究調査員・飯澤文夫研究調査員・中村正也研究調査員）に加えて、小西徳應センター運営委員・山田朗同委員、さらに土屋恵一郎名誉教授（前学長）・安藏伸治明治高等学校・中学校長（政治経済学部教授）の寄稿により、鵜澤に関する全人的な解明を図りました。

本書目次は次のとおりです。

第一章 郷里と東京遊学と弁護士 鵜澤の幼少時代と弁護士を志すまでを紹介します。

第二章 教育と大学行政 明治大学における教育と大学行政への関与を紹介します。

第三章 学問と業績 鵜澤の学問の検討と立法審査に関わる業績を紹介します。

第四章 政治家と弁護士 政治家としての活動と、弁護士として携わった主要な事件を紹介します。

第五章 生涯と著作 没後の動きと著作目録、年譜を収録しました。

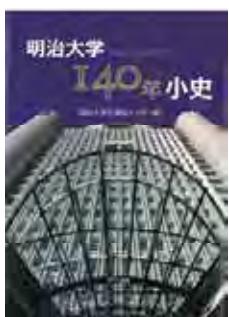
センターでは、鵜澤に関する展示コーナーの新設に加え、ご遺族から寄贈を受けた鵜澤の資料をベースとした鵜澤總明文庫を開設いたしました（本紙別掲）。また 2021 年に国立国会図書館憲政資料室において、鵜澤總明関係文書が公開されました。今後も引き続き、鵜澤関係資料の収集と分析を進めていきたいと考えています。なお本書は本校友及び教職員に差し上げておりますので、ご希望の方は大学史資料センターまでお問い合わせください。

『明治大学 140 年小史』(DTP 出版 非売品)

コンパクトな大学沿革史『明治大学 140 年小史』を刊行いたしました。

明治大学は、高等教育機関では日本で最初に沿革史『明治法律学校二十年史』(1901 年)を刊行しました。それ以来、明治大学の未来を指差す指針として、過去を記録する沿革史編纂を継続しています。

本書は、創立 150 周年を見据えて更なる発展を期すべく、「前へ—『個』を磨き、ともに持続可能な社会を創る」をコンセプトに掲げた創立 140 周年を記念して刊行したものです。本書は、大規模沿革史である『明治大学百年史』



(全4巻 1984-1994年)を参考に、コンパクトな沿革史、『明治大学小史〈個〉を強くする大学130年』(学文社、2010年・特装版2011年)および『明治大学の歴史』(DTP出版、2017年)をベースとしていくつかの章節について記述内容や、新たな事項の追加を行いました。

本書目次は次のとおりです。

第一章 明治法律学校の誕生とその隆盛（創立期から明治後期）

第二章 明治大学への改称・改組（明治後期から大正期）

第三章 戦争と明治大学（関東大震災から第二次世界大戦以前）

第四章 戦後改革と新制明治大学（第二次世界大戦後から昭和40年代）

第五章 大学紛争と大学改革（昭和40年代から昭和55年）

第六章 明治大学の現在と将来構想（昭和55年から現在）

本書では明治大学創立期から2021年の創立140周年記念式典および、そこで発表されたMEIJI VISION150までを通観可能です。過去の歴史から、現在を知り、未来を予見する検証材料として、ご活用の程お願い申し上げます。

『白雲なびく 遥かなる明大山脈 ①スポーツ編』(DTP出版)

税込800円・明治大学博物館ミュージアムショップにて販売)



大学史資料センターでは、ウェブサイトにてリレーコラム「白雲なびく～遥かなる明大山脈」(https://www.meiji.ac.jp/history/meidai_sanmyaku/6t5h7p000034mdn9.html 右QRコードからアクセスできます)の連載をしています。大学史資料センター運営委員および各分野に深い知見を有するご関係者各位から「法曹編」「政治家編」「留学生編」「財界人編」「文化人編」「キャンパス編」「施策編」など多様な分野にわたるコラムの寄稿をいただいています。



これらのコラムの蓄積を重ね、順次単行本化する予定です。

そして今回、その第1弾として「スポーツ編」を刊行いたしました。

明治大学は現在では日本屈指のスポーツが盛んな大学です。しかし1905(明治38)年に端艇部・柔道部・剣道部・相撲部・庭球部の5部が置かれたときは、決してスポーツ強豪校ではありませんでした。以降、各部が次々と生まれ、徐々にスポーツが盛んになり、現在では46部(応援団・明大スポーツ新聞部含む)が日本国内のみならず、世界へと活躍の舞台を広げる、学生スポーツ的一大拠点となるに至りました。今回、体育会46部の関係者自らの手によって、46部の歩みを綴っていただきました。本書を紐解けば、決して平坦ではなかった各部の歩みがわかります。

本書目次は以下のとおりです。

明治大学体育会の歴史に関する概説(若林幸男センター運営委員)／端艇部「劣等感は敗戦に通ず」／柔道部「明大柔道部の歴史と伝統」／剣道部「剣道部「文武両全」」／相撲部「明治大学体育会相撲部」／硬式庭球部「硬式庭球部について」／競走部「明治大学体育会競走部史」／弓道部「体育会弓道部 茶山礼宣(2004年卒)」／硬式野球部「硬式野球部」／水泳部「明治大学水泳部略史」／馬術部「明治大学馬術部の歩み」／射撃部「射撃部」／サッカーパーク「サッカーパークの沿革「人間形成」の場」／ラグビー部「ラグビー部の略歴」／ホッケー部「明治大学ホッケー部の歴史」／山岳部「世界の山々に足跡を残す“明大山脈”」／ボクシング部「1963(昭和38)年リーグ戦1部優勝と永松英吉監督」／スキーパーク「栄光のシュプール～明治大学体育会スキーパークの軌跡～」／スケート部(スピードスケート部門・アイスホッケー部門)「明治大学スケート部の歴史(スピードスケート部門・アイスホッケー部門)」・(フィギュア部門)「明治大学スケート部フィギュア部門の歴史」／バスケットボール部「バスケットボール部の歴史」／自動車部「自動車部の歴史」／航空部「航空部の歴史」／バレー部「バレー部の歴史」／卓球部「卓球部 児玉圭司『思いは叶う』」／レスリング部「明治大学で24番目に誕生したレスリング部」／アメリカンフットボール部「明治大学体育会アメリカンフットボール部の歴史」／準硬式野球部「「ジュンコー」一歴史は80年」／体操部「体操部の歴史」／空手部「空手部の歴史と岩井達」／ハンドボール部「ハンドボール部の歴史と人物」／フェンシング部「フェンシング部の歴史(創部と昭和期)」／ヨット部「ヨット部の歴史」／ソフトテニス部「思いやりと感謝—軟式庭球(1992年ソフトテニスに名称変更)指導者 斎藤孝弘(1935-2014)」／バドミントン部「『バドミントン部の伝統・歴史と輝かしい現在、そして世界へ羽ばたけ!』」／ワーナーフォーゲル部「大学ワーナーフォーゲルの父—春日井薰」／ウェイトリフティング部「明治大学体育会ウェイトリフティング部のプロフィール」／ゴルフ部「ゴルフ部の歴史」／拳法部「拳法部の歴史」／合気道部「合気道部の歴史と「正勝吾勝」」／少林寺拳法部「140周年記念大会誌」／ローバースカウト部「ローバースカウト部 その遍歴」／アーチェリー部「アーチェリー部の歴史「明治は明治らしく」」／自転車部「自転車部の歴史」／ボードセーリング部「ボードセーリング部」／ラクロス部「ラクロス部の歴史」／明大スポーツ新聞部「明大スポーツ新聞部の歴史と「独立自治」」／応援団「明治大学応援団結成の背景と校歌「白雲なびく」」初代応援団長 相馬基

明大スポーツをめぐる充実した内容の本書、ぜひご一読お願いいたします。

II 展示

大学史資料センターでは、大学史にかかる資料公開の一環として展示を行っています。今回 140 周年記念事業と連動して以下の展示等の事業を実施しました。

鵜澤總明文庫・同展示コーナー設置

創立 140 周年事業の一環として標記の常設設置を行いました。

鵜澤總明文庫は、大学史資料センターの一角に 2021 年設置しました。同文庫の基礎となっているのは鵜澤のご遺族から寄贈を受けた、書籍を中心とする資料およそ 700 点です。

資料の受け入れ後直ちに資料整理を進め、2021 年には資料目録『鵜澤總明文庫目録』を刊行しました。

同文庫内には、目録掲載の資料類を配架し、利用を容易にするとともに、鵜澤の業績を紹介する大型パネルを設置しました。

また、大学史展示室においても鵜澤總明展示コーナーを設けました。これまで十分にその事績が知られていなかった鵜澤について、内外の研究者に対して研究の便を向上させるとともに、広く一般に対しても、その人物や思想の周知を図ることを目的としています。

『鵜澤聰明と明治大学』（書籍及びシンポジウム。本紙にて紹介）と併せてぜひご覧・ご利用いただければ幸いです。



校友山脈 明治大学の教育と人材

明治大学に学び、各界で活躍する代表的な卒業生〈校友〉の紹介を主題とする、標記特別展を開幕しました（会期 2021 年 7 月 31 日（土）～11 月 3 日（祝・水）会場 明治大学博物館特別展示室）。同展示は創立 140 周年記念事業であると同時に、当センターと明治大学博物館の共同企画事業として実施しました。

創立以来、58 万人超の校友を送り出しています。

展示タイトルの「校友山脈」とは、明治大学の輩出した校友の遙かな連なりを「山脈」にたとえたものです。残念ながら顕著な功績を残した数多の校友すべてをご紹介することはできませんでしたが、展示では〈古今東西の校友群像〉の一端をご紹介しました。

この展示の中心として、表紙写真でもご紹介しているのが展示室中央横幅 11 メートルに迫る巨大な「校友山脈ウォール」です。140 年の歴史のなかで、明治大学が輩出した校友のなかから 100 名あまりをウォールいっぱいに掲示しています。校友は、①法曹、②政界・財界、③文化・芸術、④スポーツの 4 分野から、生年順に掲示しました。今回掲示した校友は、もっとも生年が早い利光鶴松氏（小田急電鉄創業者 1863 年生まれ）から最年少の児玉雨子氏（作詞家）まで生年でおよそ 130 年の隔たりがあります。



「ご存じ！明大時代小説家の系譜」と題したコーナー展示では、時代小説家として活躍した4名の作家（子母澤寛・佐々木味津三・富田常雄・五味康祐）にまつわる資料を展示しました。

連動企画として、「校友山脈 明治大学140→150周年 150人の卒業生たち 1/150—10/150」（守屋健太郎監督）と題したインタビュー企画（7頁で紹介）を行い館内で流しました。また、校友たちを育んだ明治大学の教育について紹介しました。明治大学10学部（法学部・商学部・政治経済学部・文学部・理工学部・農学部・経営学部・情報コミュニケーション学部・国際日本学部・総合数理学部）関連資料や、教育方針、求める学生像、そして卒業後の進路などをパネルでご紹介しています。今回展示でご紹介した校友は、巨大な校友山脈のごく一角に過ぎません。来館者各位のご意見を頂戴しながら、今後も継続的に本企画を続け、巨大な山脈の全容に迫りたいと思います。



明治大学×SDGs 神田学生街 140年の今↔昔



明治大学駿河台キャンパスが所在する千代田区神田。ここは日本最古で最大の学生街〈神田学生街〉です。



本企画では、絶えず成長と変化を続ける神田学生街のさまざまな〈いま↔むかし〉をめぐって、展示室とオンライン空間とを駆使してご紹介しました（会期 2022年2月3日（木）～4月10日（日）会場 明治大学博物館特別展示室）。なお同企画は前記校友山脈展の第2部として実施しました（当センターと明治大学博物館共催事業）。



コーナーIでは、「神田学生街の〈場〉。今↔昔」と題して、神田学生街の新旧さまざまなランドマークを、大学史資料センター所蔵の古写真等を活用し、展示に活かしました。紹介した今↔昔は、御茶ノ水駅前／お茶の水橋／聖橋から見る鉄道立体交差／かえで通り／吉郎坂／富士見坂／リバティタワー南脇の路地／錦華通り／すずらん通り／神保町ランドマーク／書店・古書店／靖国通り／明治大学からの眺め／神田古本まつりなどです。IIは「かつての明大生がみた神田学生街」。各界で活躍する明治大学校友14名が学生時代目にした神田学生街の風景をご紹介しました。明治大学漫画研究会による駿河台界隈マンガマップもひときわ目立って掲示されています。

III「神田学生街と取り組む・愉しむ」では、SDGsの達成に向けて学生街とともにさまざまな取組を行っている明治大学ゼミナール（商学部小林尚朗ゼミナール・政治経済学部大森正之ゼミナール・情報コミュニケーション学部島田剛ゼミナール）の活動の自己紹介をしていただきました。また会期中学内カフェ・パンセにおいて、3ゼミナール開発商品を召し上がっていただくスペシャル企画も実施しました。

さらに、SNSを活用した企画も実施。3ゼミナールの皆様による座談会「街がキャンパス！」はSNSのnote明治大学博物館公式アカウント（<https://meiji-museum.note.jp/>）でお読みいただけます（右QRコード読み取りでアクセス可能です）。同アカウントでは、明治大学博物館学生広報アンバサダーによる街紹介コラム「のんびり神田学生街」、さらに、神田学生街に暮らし・働く明治大学校友座談会「神田学生街に暮らす」「神田学生街に商う」も公開中です。併せてぜひご覧ください！



III イベント・記録

コロナ禍が終息に至らず、有観客イベントは実施できませんでした。無観客後日配信方式を取るなど、可能な範囲で以下のイベントや記録事業を実施しました。



校友山脈インタビュー

展示会「校友山脈 明治大学の教育と人材」の項目で紹介した映像インタビュー「校友山脈 明治大学140→150周年 150人の卒業生たち 1/150—10/150」(守屋健太郎監督)を明治大学公式 You Tube チャンネルにて公開中です。今回は活躍する校友 10 名(北野大・池端俊策・立川志の輔・三田紀房・野村達矢・片倉正美・加藤正俊・高橋知典・三澤世奈・児玉雨子各氏)ハイインタビューを実施しました(右 QR コードから)。本企画は コロナ禍で展示に来館できない方が多くおられることを想定し企画したものですが、企画を今後も継続し、明治大学創立 150 周年に向け、校友 150 の方々にインタビューを実施・公開する計画です。引き続きご期待ください。



鵜澤總明と明治大学（シンポジウム）

2021 年 10 月、鵜澤東明氏(鵜澤總明令孫)をお招きし無観客で実施しました。

内容は次のとおりです。柳谷孝学校法人明治大学理事長、大六野耕作明治大学長の挨拶のあと、「鵜澤總明の生涯とその功績」(村上一博センター所長)、「政治家・鵜澤總明—知られざるもう一つの足跡—」(小西徳應センター運営委員)、「明治大学付属明治高等学校・明治中学における鵜澤總明」(安藏伸治付属高等学校中学校長)、「弁護人としての鵜澤總明—東京裁判弁護団長としての弁論—」(山田朗センター運営委員)、「明治大学への貢献」(山泉進センター研究調査員)の講演が行われました(特集ページへのリンクは左上 QR コードから)。



右から柳谷孝理事長、鵜澤東明氏(鵜澤總明令孫)、村上所長、小西委員、安藏明治高等学校・中学校長、大六野耕作学長

校友山脈 その 140 年と現在（講演・座談）

オンライン開催となった第 24 回明治大学ホームカミングデーの一環として、代表的な校友を紹介する講演と、校友山脈インタビューに登場いただいた校友 3 氏、そしてインタビューをディレクションした校友の映画監督による座談会を開催しました。

セッション 1 は村上一博センター所長による「明治大学校友山脈の系譜」と題した講演で、明治大学を代表する古今東西の校友を紹介しました。

セッション 2 は各界の第一線で活躍する北野大氏(1965 年工学部卒 明治大学校友会長 秋草学園短期大学学長)、野村達矢氏(1986 年商学部卒 株式会社ヒップランドミュージックコーポレーション代表取締役社長 日本音楽制作作者連盟理事長)、守屋健太郎氏(1992 年法学部卒 映画監督)、高橋知典氏(2011 年法学部卒 弁護士)による、4 氏の現在と、「原点」としての学生時代について伺いました。映像は右 QR コードからご覧になります。





母校の歴史（講演）

前頁の「校友山脈 その140年と現在」と同様、第24回明治大学ホームカミングデーの一環として実施した企画です。

高田幸男当センター副所長が創立以来140年の明治大学の歴史を、近年の課題である国際化との関連などに触れながら、わかりやすくたどります。

映像は右QRコードからご覧になれます。



阿久悠記念館10周年記念イベント



2022年3月、阿久悠記念館が2011年の開館から数えて10周年・阿久悠生誕85周年・作詞家生活55周年を記念した「ヒットメーカー 阿久悠「詞」と「歌」の世界」を阿久悠記念館を会場として、無観客で実施しました。

柳谷理事長、村上一博センター所長、富澤成實阿久悠記念館運営責任者の挨拶のあと、第1部では、阿久とのコンビで数々のヒット曲を生み出した作曲家で、現在文化庁長官を務める都倉俊一氏をお招きしたトークイベントを実施しました。吉田悦志研究調査員（前阿久悠記念館運営責任者）、深田太郎氏（阿久悠令息）もトークに参加し、フリーランサーの荒川強啓氏の進行により、阿久悠との交流や、作曲家としての立場からの阿久悠の作詞をめぐる作品論を語っていただきました。第2部では歌手、シンガーソングライターの山崎ハコ氏をお招きし、阿久の初期代表作である「ざんげの値打ちもない」、そして阿久の未発表詞に山崎氏が曲をつけた「横浜から」「男と女の部屋」の3曲を披露い

ただきました。阿久悠ゆかりの品が並ぶ阿久悠記念館でのイベント映像、ぜひご覧ください。映像は阿久悠記念館のサイトにて告知しますので、右QRコードにてアクセスして詳細をご確認ください。



和泉第二校舎記録保存事業



新キャンパス棟「和泉ラーニングスクエア」の竣工に伴い、2022年度に取り壊しが決定している和泉第二校舎（堀口捨己設計 1960年竣工）について記録保存を行いました。同校舎は1960年代の大学生の急増に対応するため大教室8室で構成された建物で、学生の移動をスムーズにするためのスロープなど随所に工夫が見られます。当時の日本における高等教育を象徴する建物として、DOCOMOMOJAPANの日本におけるモダン・ムーブメント建築物に登録されました。その歴史的な意義に鑑み、センターでは建物の点群データ測定、テクスチャー写真・建築写真撮影、ドローン空撮、堀口捨己資料アーカイブズのご高配を得て図面の一部デジタル化などの記録保存事業を実施しました。センターでは今後これらの記録を活用していく予定です。「さよなら和泉第二校舎」特設サイトは右QRコードからアクセスください。



ニュースレター 明治大学史 No.18 | <https://www.meiji.ac.jp/history/>

発行日 2022年3月31日

編集・発行 明治大学史資料センター 所長 村上 一博

所在地 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

電話・FAX 03-3296-4448 (電話) 03-3296-4365 (FAX)

e-mail history@mics.meiji.ac.jp